

せせらぎ通信

マイクロプラスチックの採集調査

マイクロプラスチック(MP)とは、5 mm以下のプラスチックとされている。神奈川県環境科学センターが相模湾沿岸の漂着MPの研究を行っているが、より広い地域での採集分析を目指して、県民参加による採集が行われてきた。採取の容易さからこの篩を用いた約2 mm ~ 5 mmのMP採取を目標としている。金目川水系流域ネットワークも、環境科学センターから採集器具を拝借し、3回目の採集を金目川右岸の河口付近の同じ場所で行った。

天候と潮の満ち干を考慮した結果、前日の判断で急遽、11月21日(木)に行ったため、参加者は2名であったが、晴れて風もなく、砂も深いところは若干湿つてはいたものの、まずまず乾いていて、篩での採集条件としては満足であった。今回は、台風の影響を受けたためか、目標となるMPを見つけ難く、適当な採集場所を探すのに時間がかかったが、採集は、10時から始めて

何とか
12時前
には終了
できた。

その後、MPの拾い出しも行い、目が疲れてきたものの、14時頃まで奮闘して、完了することができた。

色の付いたMPは、27個と少なめで、前回より白いMPが多いと感じた。

採集したMPは、環境科学センターへ持参し、今年度中には、分析結果が出るそうなので、どのような傾向が出るか楽しみである。



(佐藤 道夫 記)

季節はずれの植物観察

ロゼットを見に出かけませんか？

皆さんもロゼットという言葉聞いたことがあると思います。バラの花に由来する言葉で、植物図鑑では、地表面付近にあるごく短い茎と、それから出るほぼ水平に広がった多数の葉の集まり」というようなムスカシイ言葉で説明されることが多いようです。セイヨウタンポポのような葉の付き方といえ、イメージしやすいと思います。

ロゼットを作る植物には、一年中ロゼットで過ごす植物と、冬など一時期だけロゼットになる植物があります。

ご存じの通りセイヨウタンポポやオオバコなどは道端や広場などの踏まれる可能性の高い場所に多く生育しており、一年中ロゼットの姿のまま生活しています。光合成によって養分を作って生活する植物の世界では、少しでも高い場所に葉を広げて光の獲得競争に勝つことが重要です。しかし、セイヨウタンポポやオオバコなどが生活する場所では、踏まれることから身を守ることでできる形をとった方が有利になります。貴重な栄養分を投資して茎を伸ばして高いところに葉を広げて、茎を踏み折られてしまつてはその投資は無駄になります。

それよりも、セイヨウタンポポのように地表面付近に埋もれた短い茎から葉を広げた方が、踏まれても踏まれても茎を踏み折られる心配が少なくなります。

冬にのみロゼットを作つて越冬する種も多くあります。春から夏にかけては少しでも高く広くと競つて成長しますが、冬になると地表面付近で葉を広げるロゼットになる植物です。光合成には光のほか温度も必要です。地表面近くで葉を四方八方に広げて日光を浴び、日光によって温められた地温を使って光合成を行い、春から夏にかけての多くの植物が盛んに生育する時期の競争を少しでも優位に戦おうという植物たちの生き様の一つの形に思われます。植物たちも冬は冬で春から夏にかけてとは異なる形になって努力しているのです。

そこで皆さん、いつもとは異なる姿を見せてくれている植物たちを観察しに出かけませんか？ **冬に植物観察なんて**と感じる方も多いかもしれません。可憐な花を咲かせているわけでもありません。はつきり言つてかなり地味です。でも、冬のロゼット観察は、冬ならではの植物の姿を見ることが出来ます。春や夏の姿よりも力強いかもしれません。まずは地面に咲く冬のバラの花たちを観察しに出かけてみましょう。

植物観察にでかけよう！

今回のフィールドは金田川ではありません。東京の下町を流れる小名木川という江戸時代に開削された運河の畔です。小名木川沿いには散歩道が整備されており、散歩やジョギング、釣りなどを楽しむ場として地域の方々に活用されています。金田川のような自然豊かな川ではありませんので、植物を観察する場所なんて無さそうですが、芝生や植栽桝の中など植物を観察できる場所が少しだけあります。正月に小名木川の散歩道を歩いてみました。今回はその時に観察されたロゼット達を紹介します。

今回のフィールドの小名木川



「セイタカアワダチソウ」

生育期に見かけるセイタカアワダチソウは、豪壮で、なかなか引き抜けず、しかも他の植物をアレロパシーで圧倒するという厄介者のイメージを抱く方も多いのではないだろうか。次の写真は冬のセイタカアワダチソウのものです。冬の姿は少しくねくねとしていて情けない感じもします。厄介者のイメージのあるセイタカアワダチソウですが、春先にロゼットから伸びてきたばかりの新芽は風味もよく、とても美味しい植物でした。筋張っていることが多いので、地面の柔らかい場所に生えているものを選ぶのがコツだと感じたことがあります。

セイタカアワダチソウ



オオアレチノギク



「オオアレチノギク」

近所の空地や駐車場、休耕地などでもよく見かける草です。ヒメムカシヨモギなどよく似た植物があり、同定に苦労している方も多いことでしょう。ロゼットの状態でも葉の切れ込みの深さなどで判断がつきます。セイタカアワダチソウと同様に、夏のオオアレチノギクは豪壮な印象がありますが、冬の間は柔らかく、少しだけやさしげに感じられます。

「ノゲシ・オニノゲシ・アキノノゲシ」

左の写真はノゲシ、真ん中がアキノノゲシ、右がオニノゲシです。どこか似た雰囲気植物です。植物図鑑で調べると、葉の基部の形状が…と同定のポイントが書いてありますが、そんな細かいところを見なくても棘々しきで十分に同定できます。この中で最も痛いのがオニノゲシ、触らなくてもわかりますが、柔らかいのがノゲシとアキノノゲシです。ノゲシには春に開花することからハルノゲシという別名があり、秋に開花するアキノノゲシとは開花期で区別することもできます。

ある植物図鑑に、「ノゲシは中国では古代に食用にされていたらしい」とこの記載があり、試しに食べてみたことがあります。かなり苦く、「こんな苦いものまで食べるなんて古代の中国人は逞しいな」と感じたことがあります。この中でアキノノゲシだけが属が異なり、レタスやサラダナに近い仲間です。そう聞くと、食べたくなるのが人情です。湯がいて食べてみたところ、ほど良いほろ苦さで、日本酒が進んだ記憶があります。



オニノゲシ



アキノノゲシ

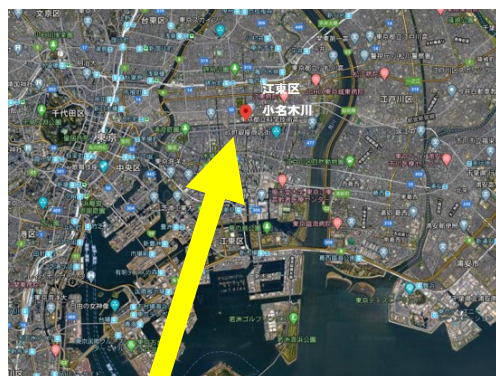


ノゲシ

「アメリカオニアザミ」

痛々しい棘を持つオニアザミが出てきたところでもう一種、棘をもつ植物を紹介いたします。オニアザミよりも痛い棘を多数もっています。本場に突き刺さるので、除草する際には十分に注意を。近年、日本各地で急激に増えてきた印象があります。環境省と農林水産省が、生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼす又はそのおそれがある種を整理した「生態系被害防止外来種リスト」にも含まれています。駆除活動を進めている自治体もあるようです。名前に「アメリカ」がついていますが、元々はヨーロッパに自生する植物です。日本へはアメリカを経由して牧草や穀物に混入して入ってきたと考えられています。

アメリカオニアザミ



小名木川の位置

おわりに

寒いのが苦手な私は、冬はどうしても家の中に籠りがちになつてしまいます。今回は思い切つて外に出てみました。かつてはそれほど多くはなかったアメリカオニアザミが多くの場所で見られ、分布を拡大していることも実感しました。紹介した植物以外にも、カンナシヤやナズナ、セリといった多数の植物を観察することができました。このような多くの発見を得ることができました。さらにいい運動にもなりました。これを機会に、一度、季節外れではありませんが、植物観察に出かけてはいかがでしょうか。

(池田 正記)



湘南里川づくりフォーラム2020を開催しました！



去る2020年2月2日(日)、東海大学湘南キャンパス十三号館及び十号館において「湘南里川づくりフォーラム2020」を開催しました。

今回のフォーラムでは、江戸川大学名誉教授 前内閣府公益認定等委員会常勤委員 恵 小百合氏による基調講演『ミズガキ検定(都市アメニティ検定)』の眼、トリの眼、イルカの眼を持つミズガキの眼で金目川検定問題を作り続けよう！』を実施後、「川の水温が上がったらどうなるの?」「子どもが遊べる川づくり」、「里川づくりと若者世代」の各テーマに分かれてプレゼンテーションや意見交換を行う「分科会」を行いました。また、特別企画として、丸太のコースター作り等の里遊び体験を実施しました。

午後の全体意見交換会では、湘南里川見守り隊をはじめ、県内各地域からご参加いただいた皆様によって活発に意見が交わされました。

湘南里川づくりに一緒に取り組む「湘南里川見守り隊」を募集しています。詳細は、ホームページで！

湘南里川づくりみんなの会

検索

お問い合わせ先

湘南里川づくりみんなの会事務局

神奈川県湘南地域県政総合センター企画調整課

電話 (0463) 22-2711 (内線 2111~3)